

海老名 発
From Ebina

いすのひじ掛けや電話機の受話器のような曲面の形をした物は、金型と呼ばれる成形された型を基に製作するのが一般的です。しかし、コンピュータを使って三次元の寸法を二次元に置き換え、精密な板金技術で製作する企業があります。今回は株式会社正和(しょうわ)製作所(東柏ヶ谷5丁目)の鈴木隆史(たかし)代表取締役社長(写真①)を訪ねました。

社会との調和を重視

昭和32年設立の同社は得意先からの発注を受けて、電子機器の外装などを生産しています。社員数は40人。最近、社員の若返りが進み、平均年齢は34才です。また、市内在住の社員が多く、徒歩や自転車通勤が8割以上という地域に根ざした会社



▶電子機器の溶接作業

です。

「会社は社会との調和が大切です」と鈴木社長。同社は準工業地域ながら住宅の多い地区に位置しており、音や振動が少ない製造用機器をそろえるだけでなく、工場内のレイアウトの工夫や防音壁の設置など、機器が発する音や振動を最小限に抑える努力をしています。

「それでも周辺住民の方には騒音や振動でご迷惑をおかけしています」と、近隣の理解の大

二次元で描く 三次元データ

切さを強く意識しています。

熟練の技が生きる先端技術

「少数の製品を金型で製作すると全体のコストが高くなってしまいます。私たちは、金型ではなく三次元データを二次元で展開して作った部品を組み合わせて製作することで、コストを抑え、多品種少量生産を実現しています」。

同社の技術は、新型の東海道新幹線のうち、微妙な曲線で形を作り上げる、車両先端部にも



使われています。

鈴木社長は、「持っているものを活かすことが大切です」と言います。同社は、創業50年の中で培った溶接・板金のノウハウを活かしながら、変わり行く時代や顧客のニーズに 대응していま

す。そのため、「経験が必要とする溶接技術を若い世代に伝えようと、熟練社員による講習会も行っています」と人と技術を大切にしています。

「経営の質」向上に取り組む

会社が生き抜くためには「経営の質の向上」が必要と、月2回、近隣企業のメンバーと勉強会を行って、「会社の将来を考えるには、一流の情報を入手することも大切」と考えています。

「長い時間をかけて経営の質の向上に取り組んできたことで、私たちが提供できるものが顧客ニーズを先取りする状況が少しずつ拡大してきました。そこにやりがいと手ごたえを感じています」。

◆

◆

こうして着実に培われる「海老名発の技術」は、海老名市が誇れるものの一つです。



撮影＝広報まちかどカメラマン・杉山良男

新春恒例の「はやしたたき初め大会」が1月29日、総合福祉会館で開催。16団体約200人が参加し、威勢のよいパチさばきや軽快な横笛の演奏等を披露しました。

子どもたちが
太鼓の共演



1月29日、文化会館大ホールで「第9回合唱のつどい」(海老名市合唱連盟主催)が行われ、11団体190人が参加。大ホールに歌声を響かせました。

響く美しい歌声

